

地域総合科学科における社会人基礎力を育成するための 実践的教育の効果と課題

鹿 島 我

The Effects and Issues of Practical Education of Nurturing Fundamental Competencies for Working Persons on Community Integrated Course

Ga KASHIMA

I はじめに

女子短期大学にとって就職率は大学運営を支える礎となる課題の1つである。特に京都光華女子大学短期大学部ライフデザイン学科(以降、本学科)のような地域総合科学科においては、文部科学省が「地域の多様なニーズに柔軟に応じることを目的としたあたらしい学科の総称」と定義付けているように、地域社会が求める人材をいかに輩出できるかが学科の存在意義である。

このニーズに応えるために本学科が重要な能力と考えているのが「社会人基礎力」である。社会人基礎力とは経済産業省が2006年より提唱している能力で「職

場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な能力」と定義付けられていて「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」という3つの能力とそれぞれを構成する12の能力要素からなる(図1)。

経済産業省では「企業や若者を取り巻く環境変化により『基礎学力』『専門知識』に加え、それらをうまく活用していくための『社会人基礎力』を意識的に育成することが今まで以上に重要となってきた」と説明している(図2)。

本学科では、文部科学省が地域総合学科に求める役割と社会人基礎力を育成することの類似点に注目し、社会人基礎力の育成を科目に反映させてきた。そんな

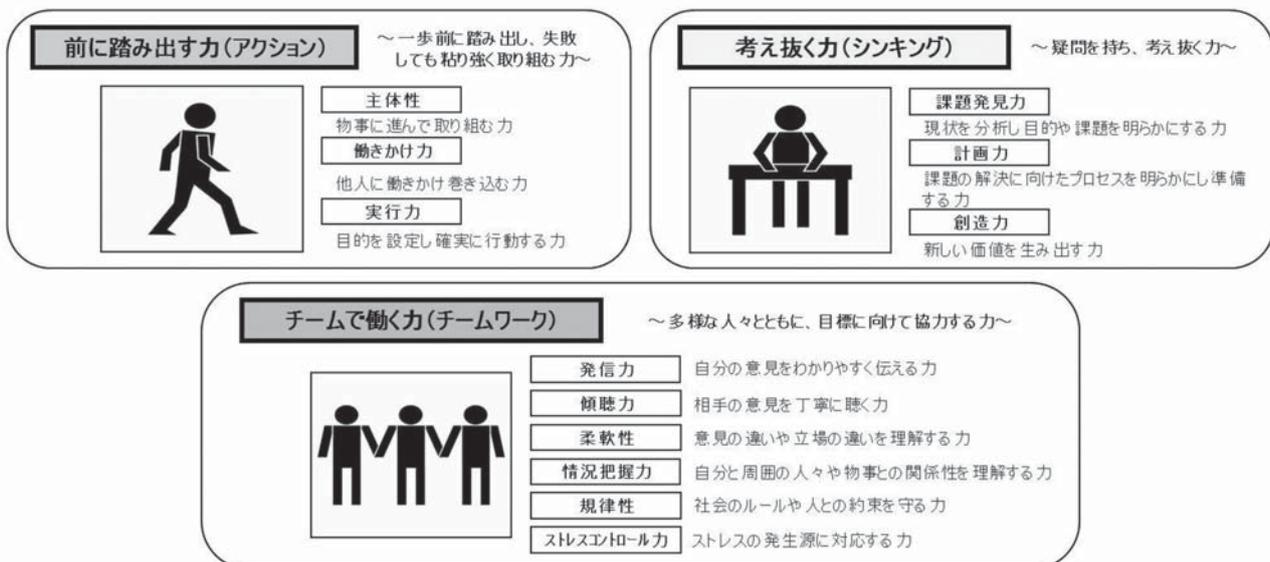


図1 社会人基礎力として必要な3つの能力／12の能力要素(経済産業省2006)

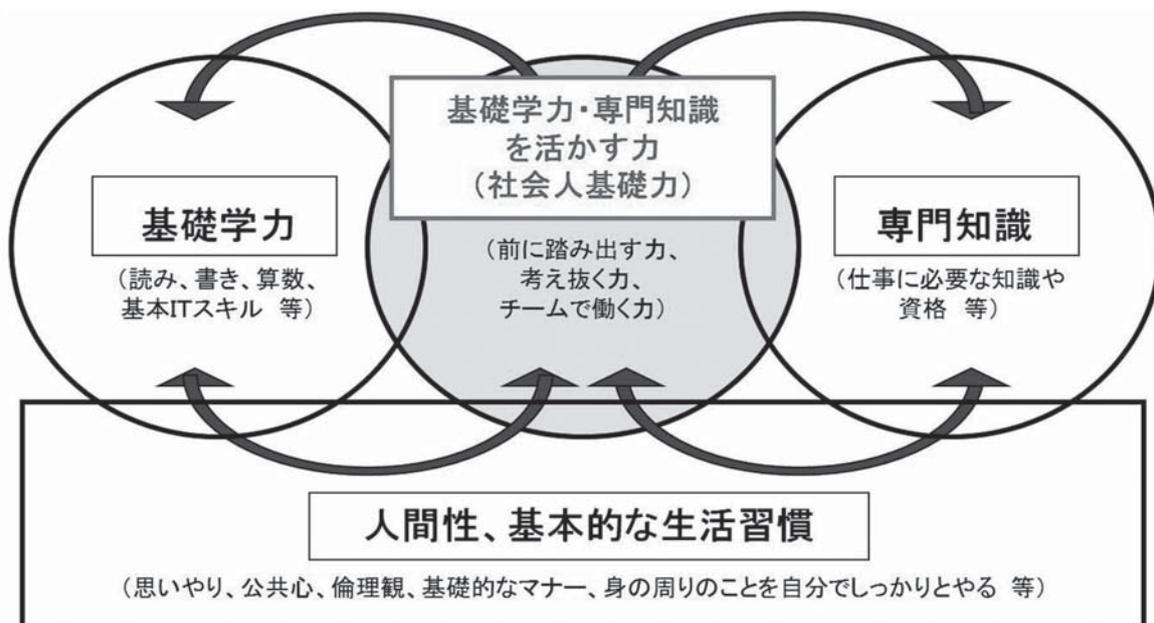


図2 今、社会（企業）で求められている力（経済産業省 2006）

教育方針と取り組みが認められ、本学科で開講している「プレゼンテーション演習Ⅰ・Ⅱ」科目が平成26年3月、経済産業省が認定する「社会人基礎力を育成する授業30選」において「就職率と就職質アップのための実践的プレゼンテーション演習」として選出された。

また、同じく3月に開催された社会人基礎力協議会主催、経済産業省共催の社会人基礎力育成グランプリ2014全国大会において「プレゼンテーション演習Ⅰ・Ⅱ」科目を基盤として取り組んだ高知県嶺北地域の活性化活動を発表し、準大賞を受賞するに至った。大会後、協会より送付された評価ポイントには「2年という短い期間で学業を修了する短期大学のモデルにもなる取組であると評価できる」と記されている。



写真2 社会人基礎力育成グランプリ2014全国大会（表彰）

本研究は「プレゼンテーション演習Ⅰ・Ⅱ」科目を社会人基礎力の育成という観点からどのように推進していけばいいかあらためて検証し、効果と課題を再認識するための報告である。さらなる向上に活用したいと考える。

Ⅱ プレゼンテーション演習Ⅰ・Ⅱの概要

この章では、「プレゼンテーション演習Ⅰ・Ⅱ」科目の必修化までの経緯と現状を紹介する。

1. プレゼン大会の提案

2010年、筆者が本学科に着任する以前よりプレゼンテーション演習Ⅰ・Ⅱ科目は存在した。当時より2



写真1 社会人基礎力育成グランプリ2014全国大会（発表）

コマ連続での開講で、1コマ目を「演習Ⅰ」、2コマ目を「演習Ⅱ」とするのではなく、第1回から第8回の1コマ目までを「演習Ⅰ」、第8回の2コマ目から第15回までが「演習Ⅱ」であった。

筆者が着任後、この科目の共同担当となった際に提唱したのが、プレゼンテーション大会（以降、プレゼン大会）の開催である。授業の最終回、第15回に企業や団体から募ったテーマでプレゼン大会を開催し、後半の授業はその大会に向けたグループワークに充てるというものである。

この提案が認められ、筆者は、後半「Ⅱ」の主担当となり、プレゼン大会に企画を提供してもらう企業や団体探し、交渉、当日のプレゼン大会の構成等を担当することとなった。

2. 開講時期と対象学年

根幹の部分は5年間で大きな変化はないが、開講時期や対象とする受講者は2段階の変遷を経て、2013年、必修化に至った。

| | |
|------------|-----------------------|
| 2年生選択科目 | 前・後期開講（2010年度・2011年度） |
| 1年生2先生選択科目 | 前・後期開講（2012年度） |
| 1年生必修科目 | 前期開講（2013年度～） |

2013年度から始まった現在の1年生必修科目では1年生1組から9組までを3つのクラスに分け、各クラスを教員2人、計6名で担当する。1クラスの受講者は30数名で、クラスによっては前年度の再履修者が加わる。

3. プレゼンテーションⅠの授業内容

プレゼンテーション演習Ⅰ・Ⅱにおいて、3クラス共通のシラバスが存在するが、授業進行の細部は各クラスの担当者が決定する。筆者が共同担当したプレゼンテーション演習Ⅰでは、下記内容に沿って2014年度の授業を進行した。

表1 プレゼンテーション演習Ⅰの授業計画(2014年度)

| 回数 | 1コマ目 | 2コマ目 |
|-----|----------|------------------|
| 第1回 | ガイダンス | アイスブレイク「プレゼンとは？」 |
| 第2回 | グループワーク① | グループワーク② |

| | | |
|-----|-----------------|-----------------|
| 第3回 | グループワーク③ | グループワーク④ |
| 第4回 | グループワーク1分プレゼン | グループワーク代表2名決定 |
| 第5回 | 1分プレゼン発表&質疑応答 | グループ分け&プレゼン内容相談 |
| 第6回 | グループでプレゼン内容相談 | プレゼン発表「LD学科の魅力」 |
| 第7回 | 個人&班対抗 中間プレゼン大会 | |
| 第8回 | 個人プレゼン（大会出場者以外） | |

4. プレゼンテーション演習Ⅱの授業内容

プレゼンテーション演習Ⅱは、最終授業で開催するプレゼン大会を軸として、逆算して進行する。

表2 プレゼンテーション演習Ⅱの授業予定(2014年度)

| 回数 | 1コマ目 | 2コマ目 |
|------|---------------|-----------------|
| 第8回 | | プレゼン大会テーマ発表&班分け |
| 第9回 | 企画提供者による説明 | 班によるプレゼン資料作成 |
| 第10回 | 班によるプレゼン資料作成 | 班によるプレゼン資料作成 |
| 第11回 | 企画提供企業（団体）の見学 | 班によるプレゼン資料作成 |
| 第12回 | 班によるプレゼン資料作成 | 班によるプレゼン資料作成 |
| 第13回 | 班ごとに模擬プレゼン | 質疑応答 |
| 第14回 | 修正を反映した模擬プレゼン | 各班で最終修正 |
| 第15回 | プレゼン大会 | |

5. プレゼン大会

プレゼン大会は既出のようにプレゼンテーション演習Ⅱの最終授業として開催される授業内イベントである。2014年度を含め下記内容で8回開催された。

(1) テーマ

- 2010年度前期：京都三条会商店街活性化プロジェクト
- 2010年度後期：光華力アップ by ライフデザイン学科
- 2011年度前期：光華力アップ by ライフデザイン学科
～フード分野の挑戦～
- 2011年度後期：2012年夏 京都駅ビル集客力アップ企画
- 2012年度前期：金山寺味噌知名度アッププロジェクト
- 2012年度後期：高知県嶺北地域活性化プロジェクト
- 2013年度：環境にいいこと何かしたい～女子大生にできること
- 2014年度：負けるなマドンナ 女子プロ野球集客力アッププロジェクト

(2) 審査員

審査員は毎回3名から4名とし、その構成は企画テーマ提供者1名、プレゼンのプロフェッショナル1名、大学関係者1名を基本とする。ここでのプレゼンのプロフェッショナルとは放送局や広告代理店などに勤務し、日ごろからプレゼンテーションの機会が多い社会人を指す。過去には下記のようなプロフェッショナルに審査員として参加してもらっている。なお、肩書は参加当時のものである。

- 杉本なつみ氏（関西テレビアナウンサー）
- 清水 次郎氏（朝日放送アナウンサー）
- 中澤 健吾氏（関西テレビプロデューサー）
- 梶谷 佳代氏（電通関西支社京都営業局スーパーバイザー）
- 勝山 倫也氏（朝日放送ビジネス戦略部部长）
- 柴田正登志氏（名古屋テレビ報道記者）
- 脇田 哲志氏（国際ジャーナリスト・NHK 前アメリカ総局長）
- 有働由美子氏（NHK チーフアナウンサー）

6. スチューデントアシスタント

プレゼンテーション演習Ⅰ・Ⅱでは、2013年度の必修科目化にともない、スチューデントアシスタント（以降、SA）制度を採用した。希望者を募るのではなく、前年度のプレゼンテーション演習Ⅰ・Ⅱの履修者の中から筆者が中心となり6名に声を掛け採用した。SAに求めたのは、プレゼンテーションを苦手とする履修者のフォローである。したがって、プレゼンを得意とするというより下級生との信頼関係が構築できるであろうと思われる学生を中心に選出した。

なお、SAには本学規定に従い、報酬が支払われる。

Ⅲ 社会人基礎力の育成

本章では、経済産業者が定める「社会人基礎力」の3つの能力、12の能力要素が「プレゼンテーション演習Ⅰ・Ⅱ」の中でどのように育成されているか2014年度の授業内容に沿って検証を試みる。

なお、「演習Ⅰに関しては、筆者が受講したアクティブラーニング講習の講師、樋栄ひかる氏の講義内容、配布資料を参考に筆者がアレンジした内容で進行している。

1. アイスブレイクにおける社会人基礎力の育成

プレゼンテーションⅠ・Ⅱが必修化されたことで最も留意したのが、プレゼンテーションを苦手とする学生への対応である。人前で話すことに対して、積極的に取り組めない学生の苦手意識を払拭しなければならない。

そのために、第1回の授業のガイダンス、アイスブレイクは重要な意味を持つ。ガイダンスでは次の点を説明する。

「授業ではなく、学びの場」

プレゼンテーション演習Ⅰ・Ⅱは授業ではない。「学びの場」である。したがって「教師>学生」ではなく、「教師=学生」である。教員は学びの場の仕掛け人である。そう説明したところで、学生、教員、SA、全員で名札を作成する。この名札は氏名を記すのではなく、プレゼンテーション演習Ⅰ・Ⅱの学びの場で呼ばれたい愛称を記すようにする。なお、筆者は筆名から「ガー」とした。

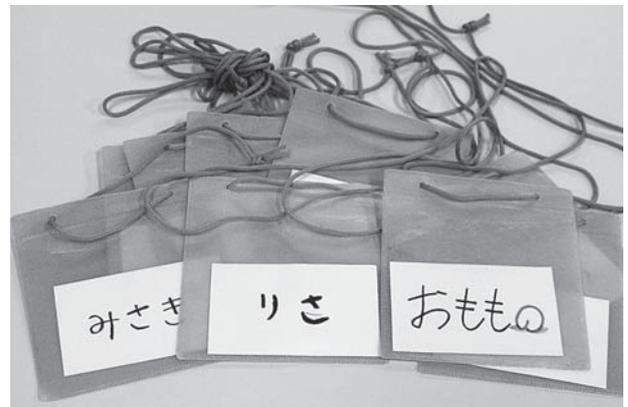


写真3 「学びの場」で使用した名札（学生）



写真4 「学びの場」で使用した名札（筆者）

さらに、学生に学びの場の5つの約束を提示する。

- 「Yes,and」
- 「Be Present」
- 「Listen」
- 「Co-create」
- 「Have Fun!」

ここまで、終わったところでアイスブレイクに進む。アイスブレイクでまず行うのが、円になっての「拍手回し」である。円の中には教員も加わり、教員が起点となり拍手を回していく。横に座っている人に向けて、手を差出し、一回手をたたく。これを順に回していき、順に2周ほどしたところで今度は逆回転する(図3)。

逆回転も2周ほどしたところで、今度は隣ではなく、円の中の離れた位置に座る学生に拍手を回すのではなく、贈る。贈られた相手も同じように離れた席に座る学生に拍手を贈る。これを繰り返すうちにその拍手が教員の元に戻ってくる。すると、教員は次に渡す際には、拍手を贈ろうと思う学生の名前(名札に書かれた愛称)を呼んでから贈るようにする。すると学生もそれに倣い、名前を呼んでから拍手を贈るようになる(図4)。ここまで進んだところでアイスブレイクを終了し学生へ「うまく回すコツは?」という質問を投げかける。学生から「相手を見て、声を掛けてから贈るように回す」という答えが自然に出てくる。それが、プレゼンテーションの基本であり、プレゼンテーションとはプレゼント。「言葉贈る」ということを理解させたところで終了する。

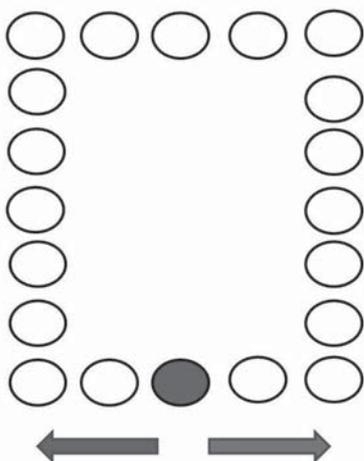


図3 前半の拍手回し

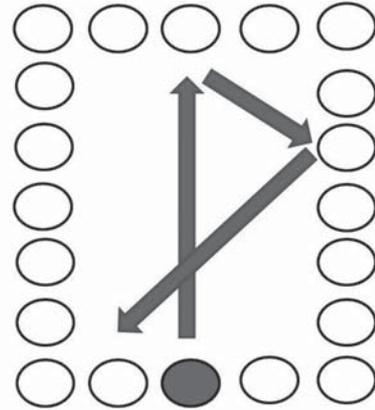


図4 後半の拍手回し

このアイスブレイクを社会人基礎力の「要素」に沿って検証してみる。評価は育成に非常に効果がある「◎」、効果がある「○」で表現する。「能力」に関しては、要素の評価から総合的に判断したものである。以降も同様の評価を行う。

表3 アイスブレイクで育成される社会人基礎力

| 前に踏み出す力 | ◎ | 考え抜く力 | チームで働く力 | ○ |
|---------|---|-------|-------------|---|
| 主体性 | ◎ | 課題発見力 | 発信力 | |
| 働きかけ力 | ◎ | 計画力 | 傾聴力 | |
| 実行力 | ○ | 想像力 | 柔軟性 | |
| | | | 状況把握力 | ○ |
| | | | 規律性 | ○ |
| | | | ストレスコントロール力 | |

2. グループワーク1回目における社会人基礎力の育成

第2回、第3回の学びの場は引き続きプレゼンテーションに関する苦手意識を払拭する期間とする。

第2回でまず行うのは「バースデーリング」である。受講者は前回作った名札を首から掛け、1月1日から12月31日まで、誕生日が早い順に円になる。この時、言葉によるコミュニケーションを一切禁じる。ジェスチャーだけでコミュニケーションをとりながらリングを完成させる。制限時間は5分とし、完成したところで、正解を発表する。発表は1月1日以降で一番この日に誕生日に近い者から始め、円になった順に自分の誕生日を発表していく。最後まで誕生日の順に並び、バースデーリングが完成したところで、全員で完成を祝う拍手し、称えあう。イベントや発表が成功するごとに拍手で称えあうことも学びの場のルールである。

バースデーリングが完成すると、1月なら1月、3

月なら3月と同じ誕生日月の者で集まり小さな円になるように座る。同じ月に誕生日の者が少ない場合は前の月、あるいは後ろの月のグループに加える。ここからグループワークとなり、それぞれの月で「自分の生まれ月のここが素晴らしい」という内容でグループワークを行う。例えば4月生まれなら「花見ができる」「入学式がある」「ウソをついても怒られない」等と意見を述べ合う。

ある程度時間を取り、意見が出そろったところで、それぞれの月ごとに「自分たちの生まれつきが一番」と思う理由について発表する。初期グループワークに関してのルールは「速く手を挙げた者から発表すること」である。発表者は各月ごとに決定してもらうが、さらなるルールとしては「じゃんけんで決める場合は必ず一番勝った人が発表者になる」こととする。積極性を植え付けていくためである。

ひと月ごとに発表が終わると、全員で発表者に賞賛の拍手を送る。こうして12カ月全部の発表を終えたところで、今度は皆の発表を聴き、「自分の生まれ月以外で生まれ変わるなら何月生まれになりたいか」について同じメンバーでグループワークをする。ある程度時間をとったところで同じルールで各月ごとに例えば、「私たち4月生まれは生まれ変わるなら8月生まれになりたいです。なぜなら、たっぷりの夏休みがあるからです」というふうに発表する。

全ての月が終わったところで、「自分の意見が認められると嬉しくないか？」と尋ね、プレゼンテーション等、人前で話すことが苦手な人の多くは「自分の意見が否定されたらどうしよう？」と発表前に考えてしまうからであると説明する。「だから、この学びの場では人の意見をいきなり否定しない。必ず、いったん肯定しよう」というルールを再確認させ、人前で発言することへの恐怖心を抱かせないように配慮する。

バースデーリングが終わったところで、学生に「同じようなリングを作りたいがどんなリングなら作ることができるだろう？」と投げかける。すると学生の中から意見がいくつかの意見が出る。ある程度意見が出そろったところで、作りたい順番にリングを作っていく。実際に学生から出されたアイデアとしては「身長順のリング」「靴のサイズのリング」「通学時間のリング」「アルバイトの時給のリング」などがある。

こうして、リングができたところで、同じルールで

グループ分けを行い、自分たちのグループのいい部分、生まれ変わることができるならどのグループがいいかをグループで話し合って発表することを何パターンか繰り返し終了となる。何度か繰り返すことで、いろいろな学生同士がコミュニケーションを取り、自然に親交が深まる。前提にあるのは「人は共通項を持つ相手に親近感を抱く」ということである。

第3回の学びの場は、トランプ等を使ってアトラダムに学生を5, 6人ずつのグループ6つに分ける。学びの場では、既出のように可能な限り多くの学生とグループワークを行う機会を設ける。

ここで、学生に「人前で話をするのが苦手な人」について調査を行うと半数以上の学生が挙手する。この人数を確認してから進めていく。

グループができたところで、まず、名札に書かれている呼び名のいわれについてそれぞれが理由を説明する時間を設ける。6人それぞれが説明を終えたところで、グループワークの題材として「自分がグループの中で一番と思うこと」というテーマについてそれぞれ発表してもらう。発表の順番は各グループで決める。これをグループの6人全員が行う。6人の発表が終わったところで、6人で話し合い、自分たちのグループの中で一番すごい「一番」を決めてもらう。理由は自由である。

各グループの一番が決まったところで、それぞれのグループの一番を紹介してもらう。この時のルールは、一番に選ばれた本人が発表するのではなく、選ばれた本人以外が紹介することである。全てのグループの発表が終わったところで、グループメンバーをシャッフルする。シャッフルの方法は各グループで1番目に発表した人、2番目に発表した人、3番目に発表した人という共通項で集める。新しいグループが決まったところで、グループの新しいテーマを発表する。例えば、「一番すごい私の友人」とする。この日は「1番」にこだわったテーマであると認識することとなる。その後の段取りは同様とする。これを数回繰り返したところで、確認するのが、「今日の内容で発表するのが難しかった人」と尋ねると、ほとんど手が挙がらない。即座に「今日、はっきりしたことは、みんなは『人前で話をするのが苦手』なのではなく、『人前で“自分”の話をする』のが苦手なだけ。他人の話をするのは苦手じゃない」と締めくくって、終了する。

以上、第2回第3回のグループワークを合わせて社会人基礎力の能力・要素に沿って検証してみる

表4 グループワークで育成される社会人基礎力

| 前に踏み出す力 | ◎ | 考え抜く力 | ○ | チームで働く力 | ◎ |
|---------|---|-------|---|-------------|---|
| 主体性 | ◎ | 課題発見力 | | 発信力 | ◎ |
| 働きかけ力 | ○ | 計画力 | | 傾聴力 | ◎ |
| 実行力 | ○ | 想像力 | ◎ | 柔軟性 | ◎ |
| | | | | 状況把握力 | ○ |
| | | | | 規律性 | |
| | | | | ストレスコントロール力 | |

3. ミニ個人プレゼン大会における社会人基礎力の育成

第4回からの学びの場は、第7回に予定している1分間プレゼンに向けての進行となる。まず、グループワークの体制にして、教員側が用意した6つの共通テーマを提示する。「私の家族」「私のペット」「私の故郷」「私のごちそう」「私の失敗」「フリーテーマ」等である。これらについて、まず、それぞれが自分の最も話しやすいテーマを3つ選び、内容について考える時間を設ける。話す内容を概ね固めたところで、各グループにストップウォッチを与え、1分間の制限時間の中で1人ずつ「テーマ」に沿ってミニプレゼンを行う。3つのうちどのテーマからプレゼンを行うかは自由である。プレゼンは1人がプレゼンを終わると、残りのメンバー全員が順に質問する。この時、パスすることは許されず、必ず1人1つは質問することを義務付ける。

これをグループのメンバー全員が繰り返す。全員が終わるまでこれを繰り返したところで、グループで話し合いを行い、自分たちのグループで最もプレゼンが上手であった2人を選出する。各グループから選ばれた2人を全員に発表したところで終了となる。

第5回は、各グループから選ばれた12人によるクラス内ミニ個人プレゼン大会を開催する。12人が、前週のグループ内プレゼンで最も評価の高かったテーマでプレゼンを行う。1人が終わるごとに質問タイムを設け、12人に選ばれなかった学生は質問者役となり、発表者のプレゼンの中でわかりにくい部分を質問する。翌週に控える全クラスによる中間プレゼン大会に向けて、参加する学生に修正ポイントを教示することとなる。

全12人の発表が終わったところで学生の相互投票

によって、クラス代表2名を決定する。

以上、ミニ個人プレゼン大会を社会人基礎力の能力・要素に沿って検証する。

表5 ミニ個人プレゼン大会で育成される社会人基礎力

| 前に踏み出す力 | ◎ | 考え抜く力 | ○ | チームで働く力 | ○ |
|---------|---|-------|---|-------------|---|
| 主体性 | ◎ | 課題発見力 | | 発信力 | ◎ |
| 働きかけ力 | | 計画力 | | 傾聴力 | ◎ |
| 実行力 | ◎ | 想像力 | ◎ | 柔軟性 | |
| | | | | 状況把握力 | ○ |
| | | | | 規律性 | |
| | | | | ストレスコントロール力 | |

4. ミニグループプレゼン大会における社会人基礎力の育成

第5回の2コマ目では、まずアトラダムに6つのグループを作り「ライフデザイン学科の魅力を友人に伝える」というテーマでのグループプレゼンの内容について話し合う時間を設ける。この回は、大まかな流れを作るくらいで終了となる。

第6回は1コマ目を使って、プレゼンテーマに沿った最終的な流れを完成させる。中間プレゼンではパワーポイント等のスライドは使用しないので、発表する内容について役割分担を決める。パワーポイントを使用しないので、コント風、演劇風と動きを取り入れるグループ等もあり、バラエティに富んだ内容になる。

2コマ目は続けて、グループによるクラス内ミニ個人プレゼン大会を行う。個人プレゼンの時と同様、クラス代表の2チームを決定する。

以上、ミニグループプレゼン大会を社会人基礎力の能力・要素に沿って検証する。

表6 ミニグループプレゼン大会で育成される社会人基礎力

| 前に踏み出す力 | ◎ | 考え抜く力 | ○ | チームで働く力 | ◎ |
|---------|---|-------|---|-------------|---|
| 主体性 | ◎ | 課題発見力 | ○ | 発信力 | ◎ |
| 働きかけ力 | ◎ | 計画力 | ○ | 傾聴力 | ◎ |
| 実行力 | ◎ | 想像力 | ○ | 柔軟性 | ◎ |
| | | | | 状況把握力 | ○ |
| | | | | 規律性 | |
| | | | | ストレスコントロール力 | ○ |

5. 中間プレゼン大会における社会人基礎力の育成

第7回、中間プレゼン大会は学内の小講堂で開催する。3クラスの学生全員が客席に座り、個人プレゼン、グループプレゼンの順に進行していく。

制限時間は個人プレゼン2分、グループプレゼン5分である。客席の学生は質問者となり、1人、もしくは1グループが発表を終えるごとに質疑応答の時間を設け、質問を受け付ける。この時、事前に全学生には、質問へのスムーズな受け答えも発表者、発表グループに対する審査に加えてほしいことを伝えておく。

全ての発表が終わったところで、学生の相互投票の結果のみで個人プレゼン、グループプレゼン、それぞれの優勝者を決定し発表する。なお、教員は発表者に対し、独自の評価を行う。

第8回の1コマ目はクラス代表を決めるクラス内プレゼン大会に参加した12名を除く全員が1分間のプレゼンを行う。このプレゼン内容を中間プレゼン大会に出場しなかった学生に対する教員評価とし、プレゼンテーション演習Ⅰを終了する。

以上、中間プレゼン大会を社会人基礎力の能力・要素に沿って検証する。

表7 中間プレゼン大会で育成される社会人基礎力

| 前に踏み出す力 | ◎ | 考え抜く力 | ○ | チームで働く力 | ○ |
|---------|---|-------|---|-------------|---|
| 主体性 | ◎ | 課題発見力 | | 発信力 | ◎ |
| 働きかけ力 | ◎ | 計画力 | | 傾聴力 | ◎ |
| 実行力 | ◎ | 想像力 | ○ | 柔軟性 | ○ |
| | | | | 状況把握力 | |
| | | | | 規律性 | |
| | | | | ストレスコントロール力 | |

Ⅳ プレゼンテーション演習Ⅱにおける社会人基礎力の育成

本章では、前章に続くプレゼンテーション演習Ⅱに関する社会人基礎力について検証する。

1. プレゼン大会に向けたグループワークにおける社会人基礎力の育成

第8回の2コマ目、プレゼンテーション演習Ⅱにおける1回目は、第15回に開催するプレゼン大会のテーマを提供してもらい企業名や団体名とプレゼンテーマを発表し、質問を受け付ける。学生がある程度イメー

ジを抱いたところで、第9回から第15回までのスケジュールを発表する。なお、プレゼンテーションⅡでは、学びの場という呼称は継続するものの強調しない。

続いて、プレゼン大会に臨むグループ分けを行うが、この時もアトランダムにトランプなどで決め、仲の良い学生同士でグループを組ませないようにする。ただし、各グループにパワーポイントによる資料作成が可能な学生が最低1名存在するかどうかは確認する。もし、グループのメンバー全員、操作が不得手と判明した場合のみ、一部メンバーの入れ替えを行う。

この日はグループで軽く話をしたところで終了とする。

第9回は可能な限り、プレゼンテーマを提供してもらい企業や団体から代表者1名に来てもらい、あらためてテーマについて説明してもらい、その際、資料や商品、パンフレットなどを持参してもらい、また、パワーポイントを使って、「何故、女子大生に企画提案を依頼するのか」を明確にしてもらい、

2014年度は女子プロ野球フローラの運営スタッフとコーチ兼任選手に来てもらい、女子プロ野球の現状と求める企画について説明してもらった。



写真5 プレゼン大会の企画説明（スタッフ）



写真6 プレゼン大会の企画説明（選手）

2 コマ目は引き続き説明者に可能な限り残ってもらい、学生からの質問を受け付ける。学生はこの日の2コマでグループ内でプレゼンテーマのイメージを膨らませていく。

以上、プレゼン大会に向けたグループワークを社会人基礎力の能力・要素に沿って検証する。

表8 プレゼン大会に向けたグループワークで育成される社会人基礎力

| 前に踏み出す力 | ◎ | 考え抜く力 | ◎ | チームで働く力 | ◎ |
|---------|---|-------|---|-------------|---|
| 主体性 | ◎ | 課題発見力 | ◎ | 発信力 | ◎ |
| 働きかけ力 | ◎ | 計画力 | ◎ | 傾聴力 | ◎ |
| 実行力 | ◎ | 想像力 | ◎ | 柔軟性 | ◎ |
| | | | | 状況把握力 | ◎ |
| | | | | 規律性 | |
| | | | | ストレスコントロール力 | ◎ |

2. 実地取材における社会人基礎力の育成

第10回からはプレゼン資料の作成を重点的に行うが、可能な限り早い時期に実地取材を行う。この場合の実地とは、提供されたテーマの現状を観察できる場所である。大学からの移動が比較的スムーズで、ある程度の人数が参加可能という条件ではあるが、1回目のプレゼン大会以来、毎回開催している。高知県嶺北地域の活性化をテーマにした際も学園のマイクロバスで現地まで出かけている。

ただし、メンバーは全員参加が物理的に不可能な場合が多いので、各チームから2名までと制限する場合が多い。また、取材の際には質疑応答の時間をたっぷりと取ってもらう。学生には事前に質問内容を吟味してくるように申し渡しているのも、それに加え、当日の取材で生じた疑問などもその日のうちに解消できるようにする。さらに、学生にはデジタルカメラ、スマートフォン等でプレゼン資料となる写真を撮影するようにも申し渡しておく。

2014年度はわかさスタジアムで開催される女子プロ野球リーグ、フローラ対ディオオーネの試合にスタッフと観客として多数の学生が参加可能だったため質問の機会は別日とした。



写真7 実地取材（集合写真）



写真8 実地取材（スタッフ）

以上、実地取材を社会人基礎力の要素・能力に沿って検証する。

表9 実地取材で育成される社会人基礎力

| 前に踏み出す力 | ○ | 考え抜く力 | ○ | チームで働く力 | ○ |
|---------|---|-------|---|-------------|---|
| 主体性 | ◎ | 課題発見力 | | 発信力 | |
| 働きかけ力 | | 計画力 | | 傾聴力 | ◎ |
| 実行力 | | 想像力 | ○ | 柔軟性 | |
| | | | | 状況把握力 | |
| | | | | 規律性 | ◎ |
| | | | | ストレスコントロール力 | ◎ |

3. プレゼン大会における社会人基礎力の育成

プレゼン大会本番へのアプローチは中間プレゼン大会と同様である。まず、クラス内でプレゼン大会を開催し、クラス代表の2チームを選出する。

クラス代表の2チーム×3クラス分、計6チームが提供されたテーマでプレゼンを行う。出場できなかった学生は観客となり質問する役割を担う。

当日のスケジュールは次のようになる。

- 9:30 スタッフ集合・準備
- 10:30 リハーサル開始
- 11:30 リハーサル終了・手直し
- 12:00 審査員到着・食事&打ち合わせ
- 12:50 プレゼン大会スタート
- 14:20 発表終了・審査開始
- 14:30 SA タイム&審査員によるミニ講義
- 15:40 審査結果発表
- 16:00 終了

観客となる学生も午前中のリハーサルから参加する。裏方のスタッフの働きぶりや円滑にイベントを進捗させるために必要な準備についても学ぶためである。

プレゼン大会の進行はSA二人が務める。1チームあたりの持ち時間は12分。プレゼンが8分、質疑応答が4分である。8分を超えてプレゼンが続く場合はSAによって終了を告げるベルが鳴らされ、ただちにプレゼンを終了しなければならない。

出場チームはプレゼン以外での演出でも審査員に印象付ける。2014年度も手に「ひまわり」のアクセントを付けたチーム、そろいのシャツで登場するチーム等の工夫が見られた。



写真9 プレゼン大会出場チーム①(手にひまわりのアクセント)



写真10 プレゼン大会出場チーム②(そろいのTシャツ)

プレゼン大会開始後はプレゼンと質疑応答を繰り返す。3人の審査員には事前に難度の高い質問をしてもらうように依頼しておく。審査員の質問後は学生からの質問を募るが、2014年度は審査員の質問だけで予定時間終了となった。

6チームが終わったところで終了。審査員は別室での審査のため退席し、最優秀プレゼンを決める最終審査に入る。その間、会場ではSAが時間をつなぐ。

また、審査結果は出た後は、当日の審査員の中から1人、ミニ講義を行ってもらう。ほとんどの場合はプレゼンのプロフェッショナルとして参加する審査員が行う。

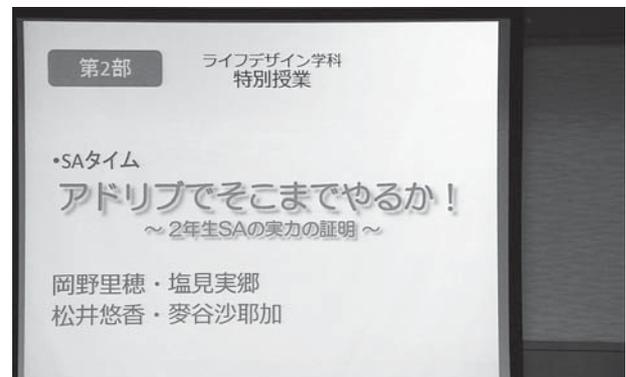


写真11 SAによる特別授業(SAタイム)



写真12 審査員によるミニ講義

その後、出場チーム全員と審査員会員が登壇し、審査委員長より最優秀プレゼンチームが発表され、審査員全員による総評の後、大会は終了となる。終了後は健闘を称えあい、審査員、プレゼン大会出場者全員で記念撮影を行う。



写真 13 プレゼン大会後の集合写真

以上、プレゼン大会を社会人基礎力の能力・要素に沿って検証する。

表 10 プレゼン大会で育成される社会人基礎力

| 前に踏み出す力 | ◎ | 考え抜く力 | チームで働く力 | ○ |
|---------|---|-------|-------------|---|
| 主体性 | ◎ | 課題発見力 | 発信力 | ◎ |
| 働きかけ力 | ◎ | 計画力 | 傾聴力 | ◎ |
| 実行力 | ◎ | 想像力 | 柔軟性 | |
| | | | 状況把握力 | |
| | | | 規律性 | |
| | | | ストレスコントロール力 | ○ |

V まとめ

1. プレゼンテーション演習 I・II の効果と課題

本稿では、必修科目「プレゼンテーション演習 I・II」を受講することで、第 1 回から第 15 回までの内容によって育成される社会人基礎力の違いについて検証を行った。

これをトータルし、「プレゼンテーション演習 I・II」科目として育成される社会人基礎力について整理してみる。

プレゼンテーション演習 I・II の授業を通して育成される社会人基礎力の要素を総合して点数化を図る。「◎」を 2 点、「○」を 1 点として、平均してみると次のようになる。

| | | |
|---------|-------|-------|
| 前に踏み出す力 | 主体性 | 2.0 |
| | 働きかけ力 | 1.375 |
| | 実行力 | 1.5 |
| 考え抜く力 | 課題発見力 | 0.375 |
| | 計画力 | 0.375 |

| | |
|-------------|-------|
| 想像力 | 1.375 |
| チームで働く力 | 1.5 |
| 発信力 | 1.75 |
| 傾聴力 | 1.75 |
| 柔軟性 | 0.875 |
| 状況把握力 | 0.75 |
| 規律性 | 0.625 |
| ストレスコントロール力 | 0.5 |

この点数を踏まえて、社会人基礎力の各要素について、四捨五入した数値が 1.5 ～を「◎」1.0 ～を「○」としてまとめ、各能力に反映させると、次のような結果となった。

表 11 プレゼンテーション演習 I・II で育成される社会人基礎力

| 前に踏み出す力 | ◎ | 考え抜く力 | チームで働く力 | ◎ |
|---------|---|-------|-------------|---|
| 主体性 | ◎ | 課題発見力 | 発信力 | ◎ |
| 働きかけ力 | ○ | 計画力 | 傾聴力 | ◎ |
| 実行力 | ◎ | 想像力 | 柔軟性 | ○ |
| | | | 状況把握力 | ○ |
| | | | 規律性 | ○ |
| | | | ストレスコントロール力 | |

この結果からプレゼンテーション演習 I・II の効果と課題が明確になったといえる。「前に踏み出す力」については、能力・要素とも十分育成することができている。「チームで働く力」についても、要素をまんべんなくフォローするような育成ができていているといえる。課題はストレスコントロール力の育成である。これに対し、「考え抜く力」は 3 要素のうち、想像力はなんとか育成できているが、課題発見力、計画力の育成が不十分であることがわかる。

この 2 要素を含めた「考え抜く力」を育成できる内容をどう盛り込んでいくかが今後の課題である。

2. 調査方法の課題

本稿の調査は教員個人の見解に基づくものであることは否めない。本来ならば、受講した学生に、「社会人基礎力の能力・要素がどれくらい育成されたと感じるか」という調査を行うべきである。

ただ、学生が社会人基礎力を十分理解できていない面が多く、正確な数値が導かれない可能性があり、今

回の手法を選択した。次回以降の課題としたい。

参考文献

- 文部科学省 2014 短期大学 地域総合科学科について
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/tandai/1312297.htm
- 経済産業省 2006 社会人基礎力
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>
- 経済産業省 2014 社会人基礎力を育成する授業 30 選
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/kisoryoku30sen.html>
- 経済産業省 2014 社会人基礎力育成グランプリ
<http://www.meti.go.jp/press/2013/03/20140311002/20140311002.html>
- Ena Comunication Inc 2003-2012 魅力ある学びの場づくり